



卒業式・答辞

今年の卒業式も在校生は代表生徒だけの出席でした。後輩の皆さんにも卒業生の言葉を知って欲しいと思い、紹介します。

太陽。それは太陽系の中心の星。私たちを暖かく、優しく照らしてくれる、なくてはならない星。そして、自らの力で自分自身を輝かせることができる強い星。

太陽がこの世界に誕生して四十六億年。私たちがこの世に生を受けて十五年。そして、この場所にきて三年。私たち四十二期生は、短くも長いこの三年間を走り続けてきました。

十五中の太陽になることを目指して、百七十五名の仲間と共に。

柔らかな太陽の光が、日を追うごとに春めいて、私たちの旅立ちを祝福してくれているかのように感じます。いつも何気なく見ていた太陽も、なんだか特別な存在に感じられる今日、私たち四十二期生は、それぞれが照らす道へと進んでいくため、この豊中市立第十五中学校を卒業します。



三年前の春陽降り注ぐあの日。全員がキラキラした表情を見せるはずだった入学式。しかしそんな私たちの表情は、すべてを覆い隠す分厚い雲のようにつけられたマスクによって遮られていました。二〇二〇年四月、日本でも未知のウイルスが流行り始めたころでした。夢と希望と少しの不安。初めて見たクラスメイト、初めて見た先生、毎年この季節になるとやってくる新入生と同じように全てが輝きを見せるはずだった学校生活も、私たちはその翌日から休校という形を余儀なくされました。

迎えた六月、ようやく分散登校がスタートしました。はじめはさぐりさぐりだったクラスも、日を追うごとに賑やかになり、二か月遅れの仮入部も始まり、少しずつ中学生らしい生活が始まっていきました。ですが実施できる行事そのものが少なく、楽しみにしていた校外学習は中止が決まり、体育大会も規制だらけで思い出と呼べるものにはなりません。延期、短縮、制限、消毒、ディスタンス、密。並ぶのはそんな言葉ばかり。それでも初めてまともにできた校内大会は自分達主体で楽しかったことを覚えています。最初は知らない人ばかりで、みんなと馴染めるのか不安でしたが、友達と過ごす何気ない時間が、まるで失われた二ヶ月がなかったかのように、心の雲を少しずつ少しずつ、晴らしてってくれた一年でした。

二年生の校外学習では、念願の琵琶湖に行くことができました。緊急事態宣言で何度も延期を重ねたせいで、季節はとっくに移り変わり、もう秋…。強風にあおられて、転覆する人達もいる中行われたクラス対抗のカヤックレースでは、クラスメイトを一生懸命応援し、大盛り上がりの歓声を冷え切った琵琶湖の空に轟かせました。すると、そん

な私たちに応えるかのように顔を出した太陽が、私たちの濡れた体を温め、思わずほっと笑顔にしてくれたことを覚えています。そして、ふと空を見上げれば、そこには大きな虹がかかっていました。それはまるで、これまでの私たちの不安を晴らし、これから始まる明るい未来を暗示しているようでした。みんなで同じ空を見上げたその瞬間、みんなでひとつのことをやり遂げることの楽しさを初めて感じることができました。

三年生。中学校生活初めての宿泊行事、修学旅行。この日のために何日も前からバスレク委員や係、先生、有志、いろんな人たちの力を集結させ、岐阜に旅立ちました。

一日目。滋賀のスカイアドベンチャーでは、いろんな人とたくさんの会話を交わしました。その日はクラスごとの分宿だったこともあり、自分達のクラスの宿はどんなところだろうと心を躍らせていました。夜は、花火、ゲームなどで盛り上がり、それぞれに楽しい時間を過ごしました。部屋でのトランプ、廊下での会話、みんなでお風呂、みんなでご飯。そんな何気ない時間の一つひとつでさえ、特別な時間でした。

そして二日目。岐阜でのラフティングでは、美しい景色が広がる中、新しい絆が生まれました。夜のBBQでは、色とりどりの服を着たサザエさんのダンスや漫才、カチューシャをつけた〇〇先生の誕生日会などで、大いに盛り上がりました。四十二期生一人ひとりが輝いていたすばらしい夜でした。

秋晴れのもと開かれた体育大会。そして、世の中の規制も少し緩まり始めたころにやってきた最後の体育大会。だからこそ全クラス、体育大会にかける思いがきっと違ったと思います。放課後の活動では、どのクラスも一丸となって取り組んでいました。いろいろな人のことを考え、ダンスを工夫したり、自分の仕事が終わっても他の人の仕事を手伝ったりと、本当に全員で頑張っていました。今思うとその時からもうすでに、今までとは確実に違った時間を過ごしている自分たちがいました。私たちににとっては経験したことのない尊い時間でした。

迎えた本番。みんなで汗を流したあの日、クラス全体、いや、学年全体で一つになれたような気がしました。競技が始まる前には一言「がんばれ！」と、競技中には常に大きな声で応援を、帰ってきたら一言「おつかれ！」と。クラスの壁を越えて、盛り上がりました。最高に楽しかった体育大会だっただけに、その一方で卒業までのカウントダウンがはじまっていることが頭にちらつき、少し寂しかったのも覚えています。

=====

そして三年最後の学年行事であり、最初で最後の合唱コンクール。受験という孤独と闘っていかなければならないこの時期に、みんなで心一つに取り組む意味を今一度考えさせられました。本番では、練習の成果を発揮し、どのクラスも素晴らしい合唱になりました。みなさんにも私たちの想いが届いていたら嬉しいです。作曲者に驚いた先生方からのプレゼントもととてもいい思い出になりました。

私たちの生活は行事だけではありません。クラス代表主催の七夕企画や体育委員主催のクラス対抗全員リレーなど多くの人が委員会活動に関わりました。生徒会執行部では『生徒全員が生徒会』という言葉掲げ、生徒会をより身近なものにしてくれました。お昼のいちご放送局は私たちににとって憩いの時間でした。

そして部活動。活動が始まったのは陽射しが強くなり始めた七月でした。仲間たちに出会い、先輩方に出会い、そして後輩たちに出会い、そこには、多くの大切な出会いがありました。嬉しい時は一緒に喜び合い、辛い時は互いに励まし合う、そんな仲間がいたから、どんな時も私たちは前を向いて進み続けることができました。

努力が報われた時、自分の力が一〇〇パーセント出し切れた時、この時の喜びは、言葉に表せないほど大きいものです。でも私の三年間は本番で力が出しきれなかった時、目標が達成できなかった時に悔しい思いをすることの方が圧倒的に多かったです。二年生の頃から全国大会で表彰台に乗ることを目指して、毎日の生活の全てを陸上のために注いできました。ずっとなりたかった大阪一番にもなることができ、絶好調で迎えたはずの全国の舞台。しかし、結果は、予選落ち。練習に対する心残りは一つもないと言い切れるほど努力してきたのに、経験したことのない緊張に襲われ、自分の力を全く発揮することができませんでした。今まで何のために頑張ってきたのか、これまでの努力は無駄だったのか、大きなショックを受け、引退後もなかなか立ち直れませんでした。

それでも、これまでの自分を何度も何度も思い返したことで、今では、目標を持って努力し続けたことに意味があり、結果が全てではない、そう思えるようになりました。全てをなげうって努力した経験が、あの場所でしか感じるができなかったあの緊張が、これからの人生において必ず役に立つと思っています。だから、嬉しい経験も悔しい経験も、全てが私にとっての大切な宝物です。

私たちがそれぞれに輝くために見えないところで常にサポートしてくださった顧問の先生方には、本当に感謝しています。

しかし私たちの三年間を振り返ると、反省しなければいけないこともたくさんありました。タブレットの使い方がいまいち加減だったり、二分前着席がなかなか守れなかったりなど、つい目の前の楽しさを優先してしまい、学校生活のルールを守れないこともありました。それでも、そんな私たちを見捨てずに指導してくださった先生方にはとても感謝しています。いつも学年集会で言われていた、「かっこいい先輩になる」という目標に向かって、失敗を繰り返しながら少しずつ成長していった私たち。少しは目標に近づけたでしょうか。

在校生のみなさん。この日のために様々な準備をしてくれてありがとう。みなさんもいずれは三年生に進級し、新しい環境の中で中学校生活最後の一年を過ごすことになりますね。三年生の一年間は本当にあっという間です。今はあたりまえで、ずっと続くと思っているような毎日が、「卒業」という二文字を意識するようになると、急に愛おしくなります。だから、今まで以上に友達との何気ない会話や、家族と過ごす時間を大切にしてください。喜びや悲しみを分かち合ってください。私たちは一人ではありません。何かあったときは、決して一人で抱え込むことなく、周りの人を頼ってください。十五中の仲間、先生、そして家族、みなさんの周りにはたくさんの味方がいることを忘れないでください。

そして一年後、たくさんの温かい思い出と共に、卒業を迎えてください。私たち四二期生も十五中ファミリーの一員として、みなさんのことを応援しています。

この三年間、一緒に過ごしてくれたみんな。毎日当たり前のように過ごしてきた日々

も今日で終わりです。今になって感じます。みんなと一緒に笑いあって過ごした毎日が私にとってどれだけ大切だったのかを。この十五中でみんなと出会えてよかった。そう思わずにはいられないくらいかけがえのない、宝物のような毎日をくれて、ありがとう。思えば私たちは、みんなで向き合ってお飯を食べたこともなかったね。今日で中学校生活は終わってしまうけど、またいつか会えたときにはひざを付き合わせて話せたらいいね。

そしていつも一番近くで私たちのことを支えてくれた、お父さん、お母さん。今日まで大切に育ててくれてありがとう。この十五年間、嬉しいことも悲しいことも辛いことも、いっぱいあったけど、どんな時でも私たちに寄り添って話を聞いてくれたね。そんなお父さんとお母さんがいたから、辛いことを乗り越えて、成長していくことができました。

喧嘩して、口聞かなくなったり、反抗期で強くあたったりすることもあったけど、そんな時でも私の味方でいてくれたね。悩み事があった時に一緒に悩んでくれたり、辛いことがあった時にたくさん話を聞いてくれたり、嬉しいことがあった時に誰よりも喜んでくれたり。そんなお父さんとお母さんが私は大好きです。入試の日は、不安で押し潰されそうな私に「大丈夫」と背中を押してくれてありがとう。お弁当に、海苔で文字を書いてくれてありがとう。おかげで少し緊張がほぐれたよ。初めて見にきてくれた、最後の体育大会や合唱コンクール。三年間の努力や成長を見てもらえているようで、すごく嬉しかった。今までたくさん迷惑をかけたし、これからも助けてもらおう場面がたくさんあると思うけど、この恩を返すことができるような大人に成長するまで、温かく見守っててください。

私たちの中学校生活は、常にコロナと共にありました。振り返ると、この三年間は、先が見えなくなるような大きな雲がかかり、不安や悔しさを感じる日の方が多かったと思います。実際に、私たちは天候に恵まれないことが多くありました。しかし、大事な時には必ず太陽が顔を出し、虹を作ってくれました。今日この日も、(残念ながら悪天候ではありますが、)最高の晴れ舞台で、大切なみなさんに見守ってもらいながら、最高の笑顔を咲かせることができました。そして、この辛さを経験したからこそ、どんなに大きな壁にぶつかったとしても必ず乗り越えていくことができると思います。いまそばにいる大切な人を、そしてこれから出逢う誰かを照らすことができると思います。毎朝必ず昇ってくる太陽のように、何事にも負けない強さを持ち、周りを暖かく、優しく照らすことができる人に、そして、人を支えることができる人に、私たちはなりたいと思います。

今日、この大切な仲間たちと別れると同時に、私たちはそれぞれの目指す道へと進んでいきます。これからの人生、雨が続くこともあるかも知れませんが、それでも、雲の間から一筋の光がさすその時まで、進み続けましょう。その先に待っている虹を求めて。

令和五年（二〇二三年）三月十四日 卒業生代表

※上の原稿には含まれていませんが、学年の先生方一人ひとりに向けた感謝の言葉もありました。次号では後輩代表からの送辞、校長式辞、そしてサプライズ企画についてお知らせします。